



Emily Dickinsonの思想の変化過程 : "Death" より "Immortality" へ

著者	岩山 太次郎
雑誌名	人文學
号	64
ページ	1-26
発行年	1963-03-15
権利	同志社大学人文学会
URL	http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000002489

Emily Dickinson の思想の変化過程

——“Death” より “Immortality” へ——

岩 山 太 次 郎

Emily Dickinson (1830-1886) は “Death” の問題をテーマにして、多数の詩を書いている。1958年に Thomas H. Johnson の編集のもとに出版された最初の全詩集は¹⁾ 1775 篇の詩を集録しているが²⁾、その内の半数以上の詩は何らかの意味で “death” に関連したものであると言っても過言ではないだろう。又、Austin Warren の言うように³⁾、Dickinson の詩の中で、詩として良きものは 300 篇、或はそれ以下の数であるということに彼女の詩を限定すれば、恐らく、それらの大半の詩は “death” という主題と関連したものから選り出さねばならないだろう。

本稿は、Dickinson の death に対する考えが、彼女の生涯を通じて、どのように変貌していったかを見ようとするものである。それを論ずるためには、Dickinson と Puritanism の関係、或は、New England、とりわけ二三度極く短期間他の地に滞在した時を除いて、彼女が生涯離れなかった Massachusetts 州の Amherst という町の地域的な特色、或は又、家庭的特色、彼女の数名の tutors や交友関係等をも軽視は出来ないが、ここでは彼女の詩に現われたものからの考察を中心に論をすすめて行きたい。

まず、詩作年代から見れば、最初の “death poem” である Poem No. 7 (“The feet of people walking home”) は彼女が 28 歳の 1858 年に書かれており、最後のもの数篇 (Poem Nos. 1646-1648) は、死の一年前 1885 年から翌年の春にかけて書かれたものである。(彼女は 1886 年 5 月

15日に死亡したのであるが、前年の11月には既に重病であり、詩作は殆んど不可能になっていた。) 手紙を例にとれば、彼女が20歳の1850年11月に、当時 Amherst 大学の instructor であった友人 Leonard Humphrey の死について書いたものが、最初の死についてのものとして残っている。⁴⁾

1864年の作品 Poem No. 870 で、

Finding is the first Act
 The second, loss,
 Third, Expedition for
 The “Golden Fleece” (St. 1)

と、人間の精神発展段階を説明している。Dickinson の考えによれば、女性の生涯は三つの時期に分けることが出来る——即ち、1) finding—childhood, a time of fear, deprivation, and hunger only partially brightened by a naïve sense of the preciousness of the gift of life, 2) loss—the age of renunciation of all the fleshly and worldly components of love 及び 3) “Golden Fleece”—the age of immortality であり、この第三期を最も重要な時期と考えた。勿論、この分割は、肉体的年齢を基としたものではなく、精神的な発展段階によるもので、最後の段階に於て、人間は生存中に immortality を垣間見、death が the age of immortality の入口になると考えた。⁵⁾

初期の詩には、女性の第一期がそうであるように、death を何か “Anguish strung” なもの、或は、厳しい容赦のないものと Dickinson が考えていたのがみられる。例えば、Poem No. 241 “I like a look of Agony” では “The Eyes glaze once—and that is Death—/... By homely Anguish strung” (ll. 5-10) という詩句も見られるし、Poem No. 258 “There’s a certain Slant of light” の最後の stanza では、

When it comes, the Landscape listens—

Shadows—hold their breath—
When it goes, 'tis like the Distance
On the look of Death—

という詩行がある。

これら二篇の詩は 1861 年の作品であり、Dickinson は、人間が外界の出来事に直面した場合、death によって感きおこされた力があらゆる人間的なもの、人間的価値のあるものを傷つけ、破壊するものであるという観念を抱いている。確かに、この時期の Dickinson の詩には、death そのものよりも、death に対する不安、恐怖というものが現われている。1863 年の作品であるが、Poem No. 705 で彼女は次のように言っている：

Suspense is Hostiler than Death—
Death—thosoever Broad,
Is just Death, and cannot increase—
Suspense—does not conclude—

But perishes—to live anew—
But just anew to die—
Annihilation—plated fresh
With Immortality—

Poem No. 280 “I felt a Funeral, in my Brain” (1861 年作) では、現実という限界を越えた無意識の状況のもとで、death の世界にある自己を描写している。その状況のもとで、人間存在の根本的なものを death を通して純粋に感じとろうとしている。それは非常に明確に感取されていて、決して Dickinson は狂気じみた観察をしているのではなく、常に正常な意識にもとづいて、当時の New England の葬式の模様や、それが醸し出す恐怖感を語っている。自分の頭の中で葬式が行われているのを感じている語り手は、参列者が歩く様子を、読経がドラムのように響くことを、更には、自分が入られている棺が持ち上げられて、その音が心にきしり、

感覚が麻痺して行くことを書いている：

... Mourners to and fro
Kept treading—treading—till it seemed
That Sense was breaking through—
....
A Service, like a Drum—
Kept beating—beating—till I thought
My Mind was going numb— (11. 2-8)

参列者の足どりを“treading—treading”と、読経のドラムのような響きを“beating—beating”と繰り返すところなどは、詩人の恐怖感の高まりを巧みに表現している。続いて、deathの世界の恐怖感、寂滅感が最後の九行で述べられる：

Then Space—began to toll,

As all the Heavens were a Bell,
And Being, but an Ear,
And I, and Silence, some strange Race
Wrecked, solitary, here—

And then a Plank in Reason, broke,
And I dropped down, and down—
And hit a World, at every plunge,
And Finished knowing—then— (11. 12-20)

これ程まで Dickinson が death に対して恐怖観念を持っていたことは、確かに、彼女が経験した他人の臨終のシーンや、当時の New England の葬式のやり方が影響を与えていることは間違いない。1862年の作品 Poem No. 389 “There’s been a Death, in the Opposite House” は、彼女の少女時代に、向いの家の人が死んだのを外から見たことを書いたものであ

ろう。死んで行く人を取りまく人達(隣人, 医師, 子供, 牧師, 帽子屋等)の動きは, 死の床にある者にとっては, 全く impersonal な動きであって, 心から死をいたんでいるとは, 詩人の目には映らない。会葬者の列は単なる黒い行列にしかすぎないように思える。

There'll be that Dark Parade—

Of Tassels—and of Coaches—soon—

It's easy as a Sign—

The Intuition of the News—

In just a Country Town— (11. 20-24)

Dickinson が息をひきとる人, そしてそれをとりまく人達を目前にして感じた death に対する恐怖は, 頹廢していた Puritans が感じていたものとは同じものではなく, Poem No. 465 (1862年作) “I heard a Fly buzz—when I died—”に見られるように, もっと純粋な感情であった。彼女自身の表現を借りれば, “The Stillness in the Room /... like the Stillness in the Air—/ Between the Heavens of Storm—” (ll. 2-3) のようなものであった。当時の New England の宗数の上にたって書かれたとは言え, death の瞬間が “that last Onset—when the King / Be witnessed—in the Room—” (ll. 7-8) という言葉で表現されているように, はっきりした Biblical overtones をこの詩には感じる事が出来る。そして, 詩人は death の恐怖のため, “I could not see to see” (l. 16) とまで言わねばならないのである。

しかし, Dickinson は death の恐怖のために自己を見失うことはなかった。彼女は, 苦しみの危機の経験, その時の感情を思い起すことにより, death の illusion と, 混乱した心に感じる非存在感を再確認しようとした。そして, 彼女が確認したものは, Poem No. 510 “It was not Death, for I stood up” という詩で言っている如く, death は単なる death ではな

く、現実世界に存在するという despair から人間を救うために来たものであるという考えである：

As if my life were shaven,
And fitted to a frame,
And could not breathe without a key,
And 'twas like Midnight, some—

When everything that ticked—has stopped—
And Space stares all around—
Or Grisly frosts—first Autumn morns,
Repeal the Beating Ground—

But, most, like Chaos—Stopless—cool—
Without a Chance, or Spar—
Or even a Report of Land—
To justify—Despair. (11. 13-24) (1862 年作)

この詩よりも 10 年程後に書かれた Poem No. 1277 で、³我々が death を恐れている間に、death がやってきた³ と言い、death の恐怖を正統化せんという考えを更に明瞭に言っている。その詩は次のようなものである：

While we were fearing it, it came—
But came with less of fear
Because that fearing it so long
Had almost made it fair—

There is a Fitting—a Dismay—
A Fitting—a Despair—
'Tis harder knowing it is Due
Than knowing it is Here. (Sts. 1 & 2)

Dickinson の詩には death の恐怖、或は、現実の despair といったも

のに対する克服とその過程をうたったものが、これ以外にも多数ある。例えば Poem No. 768 “When I hoped, I recollect” の最後の stanza は

And the Day that I despaired—
 This—if I forget
 Nature will—that it be Night
 After Sun has set—
 Darkness intersect her face—
 And put out her eye—
 Nature hesitate—before
 Memory and I— (1863 年作)

である。

彼女は death を生の一面、換言すれば、本当の生は現実の生が終焉したところから始まるものであって、たとえ、それはより困難で、恐しいものであっても、新しい生への第一段階であると考ええる。或る手紙で彼女は次のように言っている：

‘Death being the first from of Life which we have had the power to Contemplate, our entrance here being and Exclusion from comprehension; it is amazing that the fascination of our predicament does not entice us more.’⁶⁾

別の手紙でこの考えを更に敷衍して、

‘Or our first Creation we are unconscious.’⁷⁾

と言っている。これは death のみならず生に対しても unconscious⁷⁾ ということであって、death が生を我々にはじめて conscious にさせるということである。同時代の詩人 Bryant の死の事を述べた手紙では、

‘I suppose there are depths in every Consciousness, from which we cannot rescue ourselves—to which none can go with us—which represent to us Mortally—the Adventure of Death—’⁸⁾

と書いている。

これらはかなり後年の手紙に於て述べられたものであるが、death を通して生を認識するということ、death を生の一面と考える見方は、今我々が問題としている 1860 年代初頭の詩にすでに見られるものである。1862 年の作品に “I read my sentence—steadily” (Poem No. 412) に於て述べられている如く、death を識るということは生の認識の第一義的なものであった：

... she, and Death, acquainted—
Meet tranquilly, as friends—
Salute, and pass, without a Hint—
And there, the Matter ends— (11. 11-14)

death を心さわがせず識る時より、death は “a novel Agony” (l. 10) ではなくなり、彼女の心はその extremity にまで到達しているのである。

Dickinson の詩の中で最も有名なものの一つ “After great pain, a formal feeling comes—” (Poem No. 341) はこの点に関しても重要な詩でろあう。これは、雪の中で凍える人間の経験を素材として、soul の death をうたったものである。彼女がこの詩で言おうとするところは、death の苦しみの後の精神的な経験についてであり、それは決して苦悶の経験ではなく、“the state of numbness” なのである。此処で詩の全体を引用し、やや詳細な分析を試みたく思う。

After great pain, a formal feeling comes—
The Nerves sit ceremonious, like Tombs—
The stiff Heart questions was it He, that bore,
And Yesterday, or Centuries before?

The Feet, mechanical, go round—
Of Ground, or Air, or Ought—
A Wooden way

Regardless grown,
 A Quartz contentment, like a stone—

 This is a Hour of Lead—
 Remembered, if outlived,
 As Freezing persons, recollect the Snow—
 First—Chill—then Stupor—then the letting go—

主題は、前述した如く、death は肉体的な苦しみではなく精神的な苦しみであるということ、これは冒頭の一行目で明らかにされているところである。勿論、この行は抽象的な表現を借りてはいるが、全詩を通じ言えるように、それらはすべて肉体的表象と視覚的であって生命のないものによる表象の二種類の表象で展開されて行く。その上、これら二種類の表象は、Richard Chase が指摘しているように、絶対に視覚的のみには展開されない⁹⁾。例えば、最初の肉体的表象である“Nerves”と最初の視覚的表象の“Tombs”との function は、読者に視覚的な image を与えるためのものでないということである。何故ならば、“The Nerves sit ceremonious, like Tombs—”という“Nerves”や、“The stiff Heart”という“Heart”は、我々に kinaesthetic な image を与えるからである。同種の kinaesthetic な image は他の二連にも見出せる—“The Feet ... go round ... A Wooden way”と、雪の中で凍える人間の経験は“First—Chill—then Stupor—then the letting go—”と表現されている。この詩の中心の image である凍える人間という image は視覚化を目的として用いられたものでなく、“stiffness”な表象と“lifeless”な表象を使って精神的な“great pain”の後の内面経験の本質を表現するために使われているのである。

第一連の“Tombs”の表象は、そのものが石であるということから、“deadness”或は“lifelessness”ということ、並びに“stiffness”ということと関係のある表象である。又、この stiff な image は、“The Nerves

sit ceremonious” という formality と結びつき、更に第三行目の “stiff Heart” と関連をもたされている。

第二連では、歩む道は固い木の道で、しかも、歩みの動作は機械的であるということが述べられている。行動はあっても、その行動は機械的なために生命のないものであり、第一連の “Nerves” の如く、一種の儀式的な動きにしかすぎない。そして、“A Quartz contentment” の “Quartz” は鉱石の中でも固いものであるから、stiff な lifeless な image の効果を更に強めている。この表象は人間が “a formal feeling” を感じたあとの精神の無感覚さをもっていることを表わすのに非常に適切なものであろう。従って、ここに言われている “the Hour of Lead” にいる人間の満足感をこれは巧みに強調している。

最後の第三連に入り、中心になるべき新しい表象がはじめて提示される。それは雪の中で凍える人間という表象である。この表象を通して、悲しみと絶望の経験は無感覚の状態から death の状態での経験へと発展する：

Remember, if outlived,
As Freezing persons, recollect the Snow—
First—Chill—then Stupor—then the letting go—

第一連及び第二連で提示された諸々の stiff な lifeless な表象は、この三行に於て、完全に一つに纏め上げられ統一が与えられている。ここでの統一は表象の面のみならず、rhyme scheme の点でも、又、meter の点でも（第一連の pentameter から、第二連の variation を経て、第三連後半で pentameter にもどる）でも見られる。

このように “great pain” の後に来る感情を最早 “a novel Agony” でないと考えるようになった Dickinson は、同年の作品 Poem No. 536 では “The privilege to die” ということをうたう：

Th Heart asks Pleasure—first—

And then—Excuse from Pain—
 And then—those little Anodynes
 That deaden suffering—

And then—to go to sleep—
 And then—if it should be
 The will of it's Inquisitor
 The privilege to die—

同様な考えは、Poem No. 561 “I measure every Grief I meet” や Poem No. 640 “I cannot live with You—” などにも見られる。Dickinson は death がどんな悲しみをも自分に与えなく、かえって、生きていることは自らを傷つけることであり、death にこそ本当の life があると考ええる。これは“life-in-death”という考えであるが、どのような点で具体的に彼女が“life-in-death”を感じているかを検討しなければならない。

ここで、私は Dickinson の詩の中で独特な意味で使われているいくつかの言葉の内から、三つ言葉を取りあげ、“life-in-death”の思想の裏付けをしてみたい。

第一番目に取りあげる言葉は“Grace”である。本稿の最初の部分で、私は Dickinson が当時の頹廢した Puritans とは異った面をもっていることを指摘した。しかし、だからと言って、彼女が orthodox Puritan であると言うわけではない。Allen Tate の言葉“...in Emily Dickinson the Puritan world is no longer self-contained, it is no longer complete; her sensibility exceeds its dimensions. She has trimmed down its supernatural proportions; it has become a commentary upon it”¹⁰⁾にもあるように、彼女は Dickinsonian Puritan であった。そこで、“Grace”という点に関して、Dickinson と Puritanism の教義を対比して考えなければならない。

Perry Miller は Puritanism での“Grace”を説明して、次のように言っている：

For the orthodox Puritan there was no way out except to keep the two activities of God, providence and regeneration, on separate planes. God diffuses Himself through space to create and sustain the world, but there is a second emanation, over and above the original one, which is grace.¹¹⁾

神は人間に力を与え、そして grace を通して人間の violence を抑制し給うものである。神のその行為は、Miller の言葉で言えば、“a holy kind of violence” であり、それは act of communion なのである。

Dickinson には神秘的な要素が濃く、神が与え給う grace は人間の感情の高まった直観的な経験の瞬間に現われるものであり、それが redemptive status を賦するものであると考えている。

1862年の作品 Poem No. 359 “I gain it so—” という詩で、grace が次のようにして得られたと言っている：

I gain it so—
By Climbing slow—
By Catching at the Twings that grow
Between the Bliss—and me— (11. 1-4)

しかもそれは瞬間的な経験に於てうける grace である：

Look, how I clutch it
Lest it fall—
And I a Pauper go—
Unfitted by a instant's Grace
For the Contented—Beggar's face
I wore—an hour ago— (11. 10-15)

このようにして得た grace は、或る場合には、“God” 又は “Force” という言葉に置換することさえ出来るものである：

Could dimly recollect a Grace—

I think, they call it “God”—
 Renowned to ease Extremity—
 When Formula, had failed— (Poem No. 293, St. 4) (1861年作)

(事実、或る version では第一行目の “Grace” は “Force” になっている。¹²⁾)

かかる意味をもつ grace を得る瞬間が何のようなものであるかをみるために、Dickinson のよく使う “Ecstasy” と “Noon” という言葉を検討してみよう。

Charles Anderson はその著 *Emily Dickinson's Poetry* の中で、Dickinson の手紙の一節を引用している。それは、¹³⁾ “I find ecstasy in living—the mere sense of living is joy enough.” という一文である。ここで言う “living” とは “the life of the mind and the emotion” という意味である。初期の詩では、このような生活を経験するためには、その経験の度合に従って、それ相応の anguish を払わなければならないと言っている：

For each extatic instant
 We must an anguish pay
 In keen and quivering ratio
 To the extasy. (Poem No. 125, St. 1) (1859年作)

故に、猟師の言葉を借りて、傷つけられた鹿が、最も高く跳びはねた時に、death の ecstasy を感じているという Dickinson の観察も頷けるわけである：

A Wounded Deer—leaps highest—
 I've heard the Hunter tell—
 'Tis but the Extasy of death—
 And then the Brake is still!

The *Smitten* Rock that gushes!
 The *trampled* Steel that springs!
 A Cheek is always redder
 Just where the Hectic stings!

Mirth is the Mail of Anguish—
 In which it Cautious Arm,
 Lest anybody spy the blood
 And “you’re hurt” exclaim! (Poem No. 165) (1860 年作)

Dickinson が生に対して *renunciation* の観念を持つようになると、*ecstasy* を感ずるために払わねばならぬ *agony* は、神の御心に従う行為という考えに変貌して行く：

To put this World down, like a Bundle—
 And walk steady, away,
 Requires Energy—possibly Agony—
 ’Tis the Scarlet way

Trodden with straight *renunciation*
 By the Son of God— (Poem No. 527, 11. 1-6) (1862 年作)

此の世の生を *renunciate* したものにとっては、そこで感じる *ecstasy* は、たとえ *agony* を支払った後に感じるものであっても、それは “Heavenly Hurt” 或は、 “imperial affliction” (Poem No. 258 “There’s a certain Slant of light” の中の言葉) と考えられる。

そして、*ecstasy* は *grace* を受ける完全な状態であると Dickinson は言う。

Mine—by the Right of the White Election!
 Mine—by the Royal Seal!
 Mine—by the Sign in the Scarlet prison—

Bars—cannot conceal!

Mine—here—in Vision—and in Veto!

Mine—by the Grave’s Repeal—

Titled—Confirmed—

Delirious Charter!

Mine—long as Ages steal! (Poem No. 528) (1862 年作)

Dickinson が *ecstasy* という語で言おうとするものは、必ずしも精神的なもの、宗教的なもののみではなく、愛や美についても言っている。“Title divine—is mine” (Poem No. 1072, 1862 年作) という詩では、*ecstasy* ということを経典的なものと天上的なものとの *marriage* に使っている。彼女は肉体の結合という官覚的なものを否定し、*marriage* にある愛の豊かさを望んでいる。

God sends us Women—

When you—hold—Garnet to Garnet—

Gold—to Gold—

Born—Bridalled—Shrouded—

In a Day— (11.7-11)

これは女性の持ちうる “Royal” *marriage* の中で最も崇高な愛の *ecstasy* である。

Dickinson の美についての考えは、人間が苦しむこととその *redemption* について彼女が抱いていた考えに基づくものである。苦悩や苦しみのあるところに見出された *ecstasy* は、美の *ecstasy* としては、自然が我々に与えるところの “imperial affliction” に存在するものである。冬の午後斜めに射す一条の光線は、我々には “Heavenly Hurt” に思われ、“Seal Despair” である。しかし、それが去る時には、死の顔にある目に見えない、非人間的な “look”——冬が過ぎ春になるまで住まねばならない死の国の王者の顔——が退く。それは誰もが教えることの出来ない *ecstasy* で

もある：

There's a certain Slant of light,
 Winter Afternoons—
 That oppresses, like the Heft
 Of Cathedral Tunes—

Heavenly Hurt, it gives us—
 We can find no scar,
 But internal difference,
 Where the Meanings, are—

None may teach it—Any—
 'Tis the Seal Despair—
 An imperial affliction
 Sent us of the Air—

When it comes, the Landscape listens—
 Shadows—hold their breath—
 When it goes, 'tis like the Distance
 On the look of Death— (Poem No. 258)

又、美は真理と同種の状態をも意味する：

I died for Beauty—but was scarce
 Adjusted in the Tomb
 When One who died for Truth, was lain
 In an adjoining Room—

He questioned softly “Why I failed”?
 “For Beauty”, I replied—
 “And I—for Truth—Themselves are One—
 We Brethren, are”, He said—

And so, as Kinsmen, met a Night—
 We talked between the Rooms—
 Until the Moss had reached our lips—
 And covered up—our names— (Poem No. 449) (1866 年作)

美を見、その力にあづかるためには我々は人間に対する神の破壊的行為—death—を受け入れなければならない。美の redemption は、それを受けるとともに通らねばならない苦しみを受けようとするもののみが浴することの出来るものである。そして、それを受け入れる瞬間に Dickinson は喜びの崇高なる状態を経験する。美のために死ぬのは、彼女にとっては、人間が真理のために死ぬのと同じである。ここに於て、彼女は美と真理を不滅なものによる ecstasy という点で同一視しているのである。

このような状態を Dickinson は “Noon” という言葉でも表現している。これが第三番目に取りあげる語である。

Noon という語は数多くの詩に使われている。ecstasy と同じ意味に使われる場合もあるが、大体は、現実の時間が終焉して、timeless な eternity という新しい cycle が始まる確実な瞬間をさすものである。普通 “noon” という単語は “in the noon of one’s life” の如く、“the highest point or culmination; time of greatest power, brilliance, etc.” の意味で使われるように、これは決して Dickinson 特有の用法ではないが、彼女ほど “noon” を key word として使っている詩人は他に類を見ないであろう。

まず noon が単純に ecstasy をさすものを見よう：

A something in a summer’s noon—
 A depth—an Azure—a perfume—
 Transcending extasy. (Poem No. 122, St. 2)

Poem No. 287 “A Clock stopped—” (1861 年作) にある noon は、time cycle から timeless cycle へ入る死の瞬間をさすものである。時を

刻む故、生命あるものの象徴として使われている時計は、人間の生命を表わす。しかし、“Dial life”の終わった瞬間には、最早人間には秒すら意味はなく、永遠に通ずる“Degreeless Noon”へと入って行く：

A Clock stopped—
 Not the Mantel's—
 Geneva's farthest skill
 Cant put the puppet bowing—
 That just now dangled still—

 An awe came on the Trinket!
 The Figures hunched, with pain—
 Then quivered out of Decimals—
 Into Degreeless Noon— (Sts. 1 & 2)

又、Poem No. 1068 “Further in Summer than the Birds”を例にとれば、生命の頂点に夏は存在し、その衰退は晩夏より始まる。この詩にあるnoonという語で表わされるものは、timelessな瞬間であり、それはgraceやimmortalityと同じものなのである：

No Ordinance be seen
 So gradual the Grace
 A pensive Custom it becomes
 Enlarging Loneliness.

 Antiquist felt at Noon
 When August burning low
 Arise this spectral Canticle
 Repose to typify

 Remit as yet no Grace
 No Furrow on the Glow
 Yet a Druidic Difference

Enhances Nature now (Sts. 2-4) (1864 年作)

このように noon が象徴する時間を超越して経験される非時間の頂点にあるものを、Dickinson は death を越えたところに求めた。このことは、“It was not Death, for I stood up” (Poem No. 510, 1862 年作) の第一連でも分るところである：

It was not Death, for I stood up,
And all the Dead, lie down—
It was not Night, for all the Bells
Put out their Tongues, for Noon.

以上のように、*grace* 或は *ecstasy* や *noon* で表わされるものは、有限なるもの、生あるものが、無限なるもの、生を超越したものに向う詩人の精神的 communion をさすものである。故に、最大の *grace* は、“*life-after-death*” にのみ経験出来るものである。ここに Dickinson の抱いていた *immortality* の思想を我々ははっきりとみることが出来る。

確かに Dickinson は早くから *immortality* ということに関心を抱いていて、彼女の父の死後一ヶ月たった 1874 年 7 月に書いた Thomas Higginson 宛の書簡に、その事が言及されている：

... When a few years old—I was taken to a Funeral which I now know was of peculiar distress, and the Clergyman asked “Is the Arm of the Lord shortened that it cannot save?”

He italicized the “cannot.” I mistook the accept for a doubt of Immortality—and not daring to ask, it besets me still, though we know that the mind of the Heart must live if it’s clerical part do not. Would you explain it to me?

I was told you were once a Clergyman¹⁴⁾....

しかしながら、如何に早くから *immortality* について関心を持っていた

とはいえ、その思想が円熟するのは1862年頃からである。Poem No. 406 (“Some—Work for Immortality”) や Poem No. 463 (“I live with Him—I see His face”) (共に1862年の作品) では immortality は時間との関係で述べられている：

Some—Work for Immortality—
The Chief part, for Time—
He—Compensates—immediately—
The former—Checks—on Fame—

Slow Gold—but Everlasting—
The Bullion of Today—
Contrasted with the Currency
Of Immortality— (Poem No. 406, Sts. 1 & 2)

I live with Him—I hear His Voice—
I stand alive—Today—
To witness to the Certainty
Of Immortality—

Taught Me—by Time—the lower Way—
Conviction—Every day—
That Life like This—is stopless—
Be Judgment—what it may— (Poem No. 463, Sts. 3 & 4)

Poem No. 615 “Our Journey had advanced” (1862年作) で述べられている immortality 観は orthodox なものであり、Charles Anderson は次のように言う：

She is careful to define the absolute cleavage between the certainty of life
on earth and man's dream about what lies beyond the grave....¹⁴⁾

death を目前にしても、最早 Dickinson はそれを淋しいものとか苦しいも

のと思わない。或は、Poem No. 287 “A Clock stopped—”では“Degreeless Noon”にある death の time を“Decades of Arrogance”と言ったようなことはなくなり、生から death へ向うことは、永遠への旅にたつことであると考える：

Our journey had advanced—
 Our feet were almost come
 To that odd Fork in Being's Road—
 Eternity—by Term—

Our pace took sudden awe—
 Our feet—reluctant—led—
 Before—were Cities—but Between—
 The Forest of the Dead—

Retreat—was out of Hope—
 Behind—a Sealed Route—
 Eternity's White Flag—Before—

And God—at every Fate— (Poem No. 615)

人間は現世では必ず死ぬ存在である。しかし、現世で生きていても死んでいるのと同然な人間がいる——又、墓場である現世で死を意識して生きるものもある。後者のそれは精神生活への dedication であり、或は、芸術の樂園に身を捧げる生活をも意味しよう。先きには第三連及び第四連のみを引用した Poem No. 463 “I live with Him—I see His face” という詩の無名の “He” は Muse でもあろうし、又、結ばれぬ恋人でも、或は神でもあろう。しかし、目には見えないこの鎖は “He” と詩人を固く繋ぐものであり、自からがその状態に置かれることを、それは現世では成就出来ないものであるが、Dickinson は確信している。こういう自分の状態は、彼女が、“No Wedlock—granted Me—” (St. 2, l. 4) と言っているのと同様に、生の世界では完全な形にはならないものである。

Poem No.615 “Our journey had advanced” に見る如く、Dickinson が魂を death の瀬戸際まで導き、death の何たるかを認識したが、更に遠くへ導くことの不可能なることを知った。魂をその場に留めたことは、実際の死を意味するのではなく、魂の冒険としての行動である。“Being’s Road” の分かれ道は、彼女自身が immortality の信念と不信の dilemma を意識していることを示すものであるが、この地点まで達すれば、昔の無関心な生にもどることは、既に “Sealed Route” である。ここで取り得べき道は、不安はあるにしても一つしか残されていない——白い大理石の林である墓に入ること、“Eternity’s White Flag” のある神の都に向うことである。それ故、死ぬということは新しき道に入ることを意味する。かなり後年のことではあるが、僧職についていた最も親しかった従弟 Perez Cowan Dickinson に宛てた 1869 年の彼女の手紙には、次のような一節がある：

It grieves me that you speak of Death with no pang like that for those we love, nor any leisure like the ones they leave so closed behind them, but Dying is a wild Night and a new Road.¹⁶⁾

このように新しき永遠の可能性を秘めた death が immortality の観念のもとになるものであると言えよう。

Allen Tate が英語で書かれた完全な詩の一つであると賞讃する 1863 年の作品 “Because I could not stop for Death” (Poem No. 712)¹⁷⁾ では、death は caller に擬人化され、語り手と leisurely ride を一緒に楽しむ。彼等の通る道の横にある家は墓石である：

We paused before a House that seemed
A Swelling of the Ground—
The Roof was scarcely visible—
The Cornice—in the Ground—

Since then—'tis Centuries—and yet
 Feels shorter than the Day
 I first surmised the Horses Heads
 Were toward Eternity— (Sts. 5 & 6)

物語の語り手が住む場所は、最早地上でなく、彼は death の “civility” を感じる場所にいる。即ち、death は彼を immortality の状況へと連れて行く、そして、馬の頭は “Eternity” に向っており、immortality が彼等二人が乗っている馬車の目的地である。それは、Dickinson の考えでは、death が唯一の “free agent”¹⁸⁾ であるためである。その存在を見ることが出来ない神は、疑う余地があるが、death がその実在と行為を必ず現わすことはその存在の疑う余地のない証拠であると、彼女は考えている。上の詩に見られるように、death は紳士訪問者なのである。ここに於て、Dickinson は神と death とを置換して、人間と自然の間の境、魂と肉体の間の境、精神的価値と物質的価値の間の境をなくする。

Death is a Dialogue between
 The Spirit and the Dust.
 “Dissolve” says Death—The Spirit “Sir
 I have another Trust”—

Death doubts it—Argues from the Ground—
 The Spirit turns away
 Just laying off for evidence
 An Overcoat of Clay. (Poem No. 976) (1864 年作)

この詩に於ては、death は immortality の概念の中に完全に姿を没している。

Dickinson に vitality を与えるものが death であるように (cf. Poem No. 186) 又、death は lifeless な生への vitality への “gate way” であるように (Poem No. 1445)、彼女の immortality の思想はキリスト教

的に見れば、“the supple Suitor” (Poem No. 1445) であると言えよう。1876年の作品 Poem No. 1370 では death を“lonesome Glory”と彼女は言っている（これと同種の表現は後期の詩、特に1884年の作品に多く見られる）のは、Dickinson が death から完全な relief を感じていることのあらわれと言えよう。

So give me back to Death—
 The Death I never feared
 Except that it deprived of thee—
 And now, by Life deprived,
 In my own Grave I breathe
 And estimate it's size—
 It's size is all that Hell can guess—
 And all that Heaven was— (Poem No. 1632) (1884年作)

恐怖感にみちた初期の“death poem”は影をひそめ、時には Poem No. 1646 “Why should we hurry — why indeed” のような ironical なものもあるにしても、後期の詩の殆んどは immortality の考えで色取られている。James Reeves の推察した制作年を正しいものと見做せば1884年に書かれた Poem No. 1732¹⁹⁾ は、晩年の Dickinson の考えていたことをよく表わしている：

My life closed twice before its close;
 It yet remains to see
 If Immortality unveil
 A third event to me,

 So huge, so hopeless to conceive
 As these that twice befel.
 Parting is all we know of heaven,
 And all we need of hell.

Dickinson は女性の生涯の第三期、墓は immortality への入口であるという時期に達していたと言えよう。

註

- 1) Thomas H. Johnson, ed.: *The Poems of Emily Dickinson, including variant readings critically compared with all known manuscripts*, Cambridge, Mass., The Belknap Press of Harvard University Press, 3 vols., 1958.
以下、詩番号及び詩の引用はこの版による。
- 2) 1775 篇の内、約三分の二が所謂 fair copy で、他は、約 300 篇の semifinal draft と約 200 篇の worksheet draft である。
- 3) Austin Warren: "Emily Dickinson," *American Critical Essays, Twentieth Century*, ed. by Harold Beaver, London, Oxford University Press, 1959, p. 106.
この論文は、最初 *Sewanee Review*, Autumn, 1957 に 1) の書評として発表された。
- 4) Cf. Richard Chase: *Emily Dickinson*, London, Methuen & Co., Ltd., 1952, pp. 41-43.
- 5) Cf. *ibid.*, pp. 151-153.
- 6) Emily Dickinson: *The Letters of Emily Dickinson*, 3 vols., ed. by Thomas H. Johnson, Cambridge, Mass., The Belknap Press of Harvard University Press, 1958, Vol. III, p. 922. (Prose fragment, probably written in the last decade of Emily Dickinson's life)
Cf. Poem No. 1462.
- 7) Emily Dickinson: *The Letters of Emily Dickinson*, Vol. II, p. 628. (Letter to Thomas W. Higginson, dated December 1878)
- 8) *Ibid.*, Vol. II, p. 612. (Letter to Mrs J. G. Holland, dated June 1878)
- 9) Richard Chase: *op. cit.*, p. 232.
- 10) Allen Tate: "Emily Dickinson," *Collected Essays*, Denver, Alan Swallow, 1959, p. 213.
- 11) Perry Miller: *The New England Mind: The Seventeenth Century*, New York, The Macmillan Co., 1939, p. 33.
- 12) Thomas H. Johnson, ed.: *Poems of Emily Dickinson*, Vol. I, p. 212.
- 13) Charles Anderson: *op. cit.*, p. 165.
- 14) Emily Dickinson: *The Letters of Emily Dickinson*, Vol. II, p. 583.

Cf. Rebecca Patterson : *The Riddle of Emily Dickinson*, Boston, Houghton Mifflin Co., 1951, p. 380.

- 15) Charles Anderson : *op. cit.*, p. 249.
- 16) Emily Dickinson : *The Letters of Emily Dickinson*, Vol. II, p. 463.
- 17) Allen Tate : *op. cit.*, p. 205.
- 18) Richard Chase : *op. cit.*, p. 230.
- 19) James Reeves, ed. : *Selected Poems of Emily Dickinson*, New York, The Macmillan Co., 1959, p. 102.